

特集「宗教における伝統と現代性」

Theme: The Traditional and the Contemporary in Religion

対談

宗教における伝統と現代性

井門富二夫・田丸徳善

司会・中野 毅



田丸徳善氏

一 日蓮正宗と創価学会

司会 本日は、両先生にご多忙にもかかわらず、ご出席いただきましてありがとうございます。これから井門、田丸両先生に「宗教における伝統と現代性」というテーマでいろいろお話をうかがいたいと思います。このテーマを掲げた直接のきっかけというのは、ご承知のように、日蓮正宗と創価学会の再度の対立というのが昨年

暮れから起こりました。その問題は両者固有の問題でもあるかと思いますが、同時に、宗教学から見た場合に、伝統仏教教団と在家仏教運動との問題、伝統的教団と新たな宗教運動との関係、という古くからある一般的な問題をも内包しているのではないかと思います。

また、創価学会や立正佼成会等々、戦後大きく発展した宗教運動は仏教系の信徒運動が多かったわけですが、現在は西山茂さんが言っているような新・新宗教の時代に入ってきて、そちらが脚光を浴びています。その中で、戦後初期の段階から発展した大きな新宗教教団もある面では、井門先生の分類での「組織宗教」という側面がま



井門富二夫氏



司会・中野 毅氏

すます強くなってきた、さらにはどうも制度化していく過程にも入っているような感じもあります。そこで、そのように戦後大きく展開した運動がそろそろ新しい段階に入ってきているのではないか、そのようなことも今回の問題の背後にあるように思えます。

さらに、日本の宗教が世界に展開していく過程における課題、といった側面もあるのではないかと思います。創価学会は海外での布教に力を入れてきた宗教運動の一つですが、その場合には必然的にその教えの国際性、通文化性が問われてきます。そして元来の理念をできるだけ普遍性があるものとして展開していこうとしますが、

そこがまた、伝統法義の遵守を強調する日蓮正宗との間に溝ができるといった問題も、今回の底流にあるといえます。

そこで、日蓮正宗と創価学会の問題というものを一つの素材としていただき、きっかけとしていただきながら、今述べたような一般的な問題をめぐって、宗教学の立場から対談をお願いできればと思います。私自身も、あくまでも宗教社会学の立場から率直な意見を述べさせていただきますつもりです。まず、ご承知であると思うのですが、今回の創価学会と日蓮正宗との対立についての経過を、簡単に説明させていただきます。

日蓮正宗と創価学会の緊張というのは、歴史を振り返ると牧口初代会長の時代から様々にあったと言えますが、特に今回の対立問題に直接関連した流れを簡単に説明させていただきますと、私の理解している範囲では、どうも今回の問題につながりそうな、両者の対立が表面化したのは昨年、平成二年の三月頃です。宗門と創価学会とが連絡会議というものを定例で持っておりまして、宗門側が宗務総監を始めとする執行部、学会側は会

長を筆頭とする執行部が出席して行事の打合せなどの諸事項を検討してきたわけです。ところが、問題の三月に、宗門側から塔婆料などの「冥加料」を値上げしたいという通知がありました。宗門が決定したことであるからと、一方的な通知として出されたわけです。学会執行部は、会員からの供養に類する問題を事前に何の話し合いもなく通知してきたことに大分憤慨したようです。それがどうも始まり、という感じです。

それ以後、宗門の学会に対する強硬な態度が目につくようになりました。寺院の寄進が遅れているという詰問であるとか、最近の学会の布教はいい加減であるなどの発言等々、どうもおかしいということが続いたようです。それで学会側も、七月の連絡会議の時に、冥加料の値上げを学会が受け入れる代わりに、宗門の僧侶の私生活の問題とか、お講の時の信徒を馬鹿にした発言など、全国の会員から寄せられていた幾つかの問題について、学会側から僧侶の宗風をただしてほしいということを強く申し入れた。これが学会側のアクションの始まりだったわけです。

こうした中で、七月の末には、池田名誉会長と秋谷会

長が日顕親下から「法主の発言を封じたような驕慢な態度が見られる」と叱責されたりしました。細かい過程は別にして、その後もいろいろ互いにやりとりがあったようですが、十月には、総本山大石寺開創七百年慶祝大法要という大行事をとにかく無事、盛大に執り行なったわけです。その後、宗門側は再び寺院の寄進・建設が遅れているのは何故かなどと詰問したり、池田名誉会長の発言を秘かに録音したテープを入手したりして、創価学会を非難する準備を進めていました。そして十一月十六日の創価学会第三十五回本部幹部会において池田名誉会長が話した内容をもとにした「お尋ね」文書を、十二月十三日の連絡会議の時に学会側に提示しようとした。学会側は、出所を明示できないテープをもとにした文書は受け取れないと主張し、宗務総監も文書をおさめたのですが、四日後の十七日に、その文書が学会本部に郵送で送られてきました。

その「お尋ね」文書は、先生方のお手許にもあると思いますが……。その内容は、名誉会長のスピーチには法



対談風景

主批判が含まれている。他宗破折の「四箇の格言」を否定し、他宗を容認するような言動がある。キリスト教の神を賛美したベートーベンの第九交響曲の中の「歓喜の歌」を会員に歌うよう提案したのは外道礼賛である、などというものでした。その文書に対し、学会は再度話し合いを主張し、直接問いに答える代わりに九項目の疑問点を挙げた「お伺い書」を送りました。

こうして、対立がエスカレートしていったわけですが、宗門の態度が明確かつ唐突に示されたのが、十二月二十七日に臨時宗会が開かれまして、宗規の変更が行なわれたことです。そこで法華講の総講頭、大講頭ら役員に関する規定が変更され、それに伴って現在の任にあるものは全員解任されるという形で、解任処分が行なわれた。さらに、変更の中には信徒を懲戒処分できる新たな条項をも追加されて、信徒が法主を批判すると処罰されるというような規定が入ってしまったわけです。そのような経過から問題が表面化し、その後は、創価学会から宗門の今回の処置に対する抗議と批判が次々に出され、機関紙の聖教新聞などにも公表されました。

徒集団である法華講の形にしたい、各末寺の寺院に所属させて僧侶が指導していく形にしていきたいということなんでしょうね。おそらく宗門の立場としては、このままの状態では宗内に創価学会の影響力がますます広がってきて、日蓮正宗の「旧来の伝統」が守れなくなるという危機感があるかなと思います。

二つには、両者の信心に対する力点の置き所の違い、信仰観の相違とも言えます。正宗の場合は当然のことながら聖職者中心主義である。これが非常にはつきりと出てきた。とりわけ法主の位置というのが血脈の継承者であることから本尊書写や教義の解釈権など宗教上の権限を有するとともに、宗内の行政上の長としての管長職と宗教法人上の代表者という三位一体の全権を持った形である。その法主・管長に僧俗は信仰の上でも宗内行政上も信伏随従していくところに信心がある、というのが日蓮正宗の論理です。

これに対して、創価学会は、法主の血脈相承の深義を最大限に尊崇した上で、本仏・日蓮大聖人への帰依、日

その過程で、宗門は最初の「お尋ね文書」における学会批判の主な論拠を、テープの聞き違いとか、ニュースソースが不明ということで撤回してしまいます。そうすると総講頭などを解任する根拠がなくなるのですが、それを認めず、次に昭和四十七年建立の「正本堂」の意義づけをめぐる信徒たる池田会長が介入したのは教義違背だと批判してきました。これもおかしい批判で、結局、その意義を定めたのは日蓮上人であり、宣揚したのは当時の教学部長であった現現下等であると論破されてしまっています。

ともかく、学会首脳部は法主に背いている、教義違背を犯しているという批判を宗門がしがっていることはよく分かりますが、あまりはつきりした根拠がないように思えます。

現在までの経過の大筋は以上の通りなのですが、私が見ておりまして、今回はつきりと浮き彫りにされてきた問題が幾つかあると思うのです。一つは、宗門が学会をその統制下におさめたいという意思がかなりはつきり出てきたということです。つまり、創価学会を伝統的な信

蓮遺文としての御書を身をもって読んでいこう、宗祖の精神に帰ろうという信心を強調してきた。その精神というのは、日蓮の遺命でもある広宣流布、つまり折伏・弘教によって一人でも多くの衆生を救っていかう、さらにこの仏法の精神を文化や社会に反映していこうとするこ

とであったと言えます。そのための修行が、御本尊への日々の唱題行である。

同じ御本尊への信仰であっても、その強調点の違いが明らかになってきたのではないのでしょうか。

三番目に感じているのは、僧俗観の違いです。学会の場合は僧と俗とは役割の違いとする。たとえば、僧は法を守り伝えていくところに「令法久住」というんですが、そのような役割を今日まで果たしてきたけれど、今日まで継承してきたのだいた、これからも、その面では僧が中心であるだろう。それに対して、俗、信徒というのは、広宣流布というか、布教をしていく、また、信仰というのを文化や社会やさまざまな面に反映させ応用していく、そのような展開は信徒がやっていく。ただ、それは役割の違いであって、両者とも同じ本尊、同じ題目

を唱え、宗祖の遺命を達成しようとする門下という意味では平等である、と。

学会としては信仰の上での僧俗平等、そして、それぞれの役割の違いを認め合った上での「僧俗和合」を強調するわけです。ところが宗門の方では、法主の権威を強調することから必然的に僧宝、僧の立場が信徒よりも本質的に優位性を持っているのだという主張になる。したがって、正しい信仰をするためには僧に従っていかねければならないと、しきりに強調する。この僧俗観の相違は、それぞれの歴史や運動と関係してきますので、乗り越えていくのが容易ではない問題だなという気がします。

四番目には、私もこれほどとは知らなかったんですが、一部の僧侶の私生活が結構、墮落していたという点が想像以上だということでした。墮落させてしまった責任の一部は、学会にもあるという気がします。現在、学会は僧侶の墮落を中心に、これを諫めていくさまざまな主張を展開しています。さらに、寺院の収入の多くは塔婆や葬儀の供養によっているのですが、そこから塔婆供養

を強調する傾向が最近とくに多くなってきた。法要へ行くと家族全員の分の塔婆供養を毎月しなさいというような、他宗以上にひどいケースもあります。これら葬送儀礼に関する部分で、学会は宗門のあり方はこれであるのかという批判をしています。

以上、今回の経過と、その過程で明らかになってきたと思われる諸問題を、私なりにまとめましたが、このようなところを材料にしていたきながら、お話を進めていたかと思えます……。

井門　あまりにも典型的な、昔から繰り返されて論じられ、注意されてきた問題が、また出てきたなというのが、第一印象です。その上で、発言の制約について言わせていただきますが、田丸さんもそうですが、私達はあくまで宗教学の立場から論じます。というのは信仰上の観点から入ってしまうと、これは裁判所ですら立ち入れない問題なので、なかなか第三者としては論じ難いものです。あくまで宗教学一般の知識という立場から、問題を客観的に語るといふ立場をまず最初に申し上げておきます。

で、今の話を聞いていて思うのは、日蓮正宗と創価学会ともに、仏教の基本思想、あるいは両者の根本教義について大いに議論し、そこを基盤に論争してほしいということです。たとえば、仏・法・僧の三宝を守れ、という問題になってくると、これは仏教全般の問題になってきますが、このうちの僧とはどのように規定されているのでしょうか。この世から身を離して信仰に忠実なる者を意味しているにしても（キリスト教でもプロテスタントがあらわれて以来）、出家・在家を問わず、聖職は存在します。単純に日蓮正宗・創価学会の範囲内だけで論じるのではなく、仏教一般、宗教一般に関連する問題として論じてもらいたい。それが第一点。

二番目に、信仰の権威という問題はこれは仏教だけではなくてキリスト教でもどの教団でもある問題ですが、要するに、カトリック対プロテスタント型と言ってしまうえば簡単すぎますが、マタイ伝を中心にして汝の巖の上に権威を置くといった意味での、伝統的僧職を中心とした権威の継承という形が出てきますね。もう一つの形は、祭司型に対して預言者型とでも言いましょうか、在家型

とでも言うおうか、たえず人の世の中に身をおいて心の中で聖なるものを求めるというルター型とでも言いましょうか、個人の信仰に権威の基礎をおく型もあり、様々な宗教の教団のタイプとして、この二分法でもってある程度分けられるわけですね。ただし、二分法といっても複雑ですよ。初期には民衆が教祖を囲むという、非常に民主的な形をとっている場合もありますから。この分け方はあくまで高等組織宗教もしくは制度の宗教となつてからの分類のやり方と考えるとください。

今の第二の問題点にからみながらも第三番目に出てくる問題ですが、これは創価学会に向かって言うのですが、おたくは日蓮正宗の講なのです、すなわち教団内の信者組織にすぎないのか、同信の徒であっても完全に独立した組織なのか、という問いです。カトリック・アクシオン（注…カトリックの信徒による運動）のように、日蓮正宗に包含されるものなのか、それとも完全に独立した別組織なのか、という問題点が常に疑問に残ります。その点、伝統的な講とは形態を異にしているようにも思えます。

そして四番目に出てくるのが、歴史的な観点といま
しょうか、牧口初代会長が日蓮正宗を選択したその選択
の範囲をいま一度、問い直してみたい。正宗は伝統的に
七百年間ずっとあったわけでしょう。それを大正末期か
昭和の初めに、牧口会長が偶然に信徒として入る。同時
に創価教育学会という独自の理念と観点を持つ信徒組織
を作ったところに、初めから矛盾点があるように思えま
す。その辺で、アクションなのか別集団（たとえば法的
には独立する正宗の在家修養団体）なのかがおよそ分から
ない、という問題点が出てきているわけです。

第五番目は、以上すべての問題がからんで出てくるも
のですが、両方とも法人として一応、別組織になってい
るということです。現在の両者の宗憲・宗規ではどうな
っているのかは知りません。しかし昭和三十七、八年
代に両集団の統計・集計をどうするかが問われた時に
は、「別」集団だが、統計は合体して扱ってくれと言わ
れて、宗教統計担当の当事者として困り果てたことを覚
えています。ただし、講集団だって単立の宗教法人に成
れますから、それでは創価学会は日蓮正宗に包括される

ますよ、ということは何度も警告していたわけです。

二 伝統仏教教団と信徒運動

田丸 私なりに幾つか言わせていただきたいと思いま
す。まず第一に、最近の経過というのは部分的にはかな
り個人的、感情的な問題もからんでいるように見えるの
ですが、やはり問題の本質は、そういうところじゃなく
て、いわば構造的な問題だと思えますね。また、構造的
な問題にまで掘り下げていかないと、いろいろジャーナ
リステイックな報道に振り回されていくことになるの
で、我々としては、できるだけ構造的な問題点を取り出
す、という方向で考えなければいけない、ということだ
す。これは、私たちの姿勢の問題でもあります。

それで、先ほど井門先生が言われたことと結局は重なる
ことだとは思いますが、これは基本的には教団、こ
こでいう組織宗教のあり方の問題だと思えます。日本
の近代において展開した新宗教の中には、いろいろなタ
イプの運動や教団があり、しかも同じグループでも、時
とともに少しずつその性格が変わってくるということが

講集団かと聞くと、そうではないとこれまではっきり否
定されてきたわけですね。もしそうならば、日蓮正宗の
方はカトリックのように昔からある僧職を中心とする社
団法人の形を取っているわけですから、いわゆる信徒は
単なる付属物にすぎなくなります。ところが、創価学会
はそうではない、と言うんですね。自分たちはトラステ
イ（信託財団）を組むところの、つまり会員相互の委託
によって集めた独自の財源をもつ、一つの新しい信徒修
養集団としての、すなわち完全に別個の組織だと言っ
ます。両者の間には包括、被包括の形式は法的観点から
は全く結ばれていないとも聞きました。

個々の学会員に個々の寺というものに所属する講集団
のメンバーなのか、それとも創価学会員なのかと聞くと、
結果的には正宗寺院のいわゆる檀家になる面と学会員で
ある面と、日本特有の二重構造の形を取るというのです
ね。こういう性格の異なった集団が、日本特有の二重帰
属の習慣を利用しながら結び付いているわけで、そうす
ると両方の矛盾が表面化する恐れがあるので、私どもと
しましては今後よほど協調をなさらないと問題が起こり

認められます。これについては、『新宗教事典』に、西
山茂氏が新宗教と既成教団との関係の類型論というのを
書いていました。私がもともと考えていたことにも近い
のですが、四つに分けてあって、一つは傘を借りるとい
う「借傘型」、二番目が中に住む「内棲型」、三番目が「提
携型」、四番目が「完全自立型」とされています。最初
の借傘型というのは、たとえば終戦までの真如苑などが
その例にあげられる。いわゆる既成仏教教団の中に、無
理やりに認可の関係で押し込められていて、後になって
独立するわけです。次に内棲型の例として、たしか創価
学会が入っていたと思うのです。

司会 仏立宗も入っていたと思いますが……。

田丸 そうですね。創価学会と仏立宗……。提携型、
完全独立型となっていくにしたがって、組織としての分
離の度合いが強くなっていくというのです。一応、この
類型は大筋では認められると思うのですが、ある時点で
切ってみると四つのどれかに入るが、一つのグループが
時のプロセスの中で少しずつ型が変わってくるというこ
とは当然あります。

この観点からすると、創価学会は非常に奇妙な二重構造を持っている、ということがとりあえず言えると思います。一方から言えば、日蓮正宗という、いわゆる既成仏教の特定の宗派ないし教団と密接に結びついている。

ところが他方では、法人格を有するということを含めて、相当程度、独立性を持っている。かといって、全然別個ではない、ここが非常に独特なところだと思うのです。

例が適切かどうか分かりませんが、幾つかの新宗教教団、解脱会とか孝道教団というのがそれに当たるかと思いますが、とくに仏教系ですね。伝統仏教の本山から、たとえば大僧正などの高い僧位をいただいて、認知してもらおうというタイプがありますね。この場合も、非常に近い関係にあるのですが、決して一つではなくて別になっています。

しかし、これらと比べてみると、創価学会はもう少し複雑で、もう少し踏み込んだ関係になっている。歴史的にもそうなのですが、まず一つは牧口初代会長と戸田二代会長が一九二八年に日蓮正宗に入信された。その時点において、さきほど井門さんが「選択」と言われたので

すが、どうしてそこへいったのか、というその経緯は今から推測するのは難しいとしても、ともかく問題はそもそもその時点からスタートしてくるということが一つ。

それ以後も、両者の一体性はずっと強かったように思えるのですが、どうでしょう。授戒で正宗に入信して、なおかつ創価学会の会員になる、ということだったんでしょう。また、登山会というのも戦後の総本山の荒廃ぶりを見かねた戸田会長が、大石寺を興隆させるために始めたものですね。そこで、二つにして一つのような性格が最初からあった。それが少しずつ分化の方向に動いてこうとするけれども、しかし他方では、両者の一体性を保とうという方向もやはりある。ある意味で今回の件もその辺の、内在的な矛盾というのが顕在化してきたのではないかと考えています。

最初は、組織上も二つが一体であるようなところがあった。それが、組織はどんな組織でもある程度独立を志向する方向性を持っていると思いますので、どうしてもそれが表面化して、個人の問題とは別に出てきているのだからうかという気がしているんです。

私は、日蓮正宗と創価学会というのは、体の一部が癒着した、いわゆるシャム双生児にたとえられるのではないかと、かねがね思っています。それぞれを独立させるには、切断するという大手術をする必要があるが、それはどちらにとっても大変な痛みを伴うし、下手をすると致命的になりかねない。

さらに、歴史的なことを幾つか考えますと、日蓮正宗というのは明治時代までは明らかに弱小教団で、寺院数は四十幾つかしかなかった。それから昭和六年でも一六か寺、三二教会、教師が五三八人という記録が残っている。とにかくその程度の規模の比較的小さな教団にすぎなかった。それが現在では数も大きくなっている。この変化は、やはり学会による寺院の寄進によってであることは明らかです。ですから一面から言うところ、日蓮正宗は明らかに創価学会によって発展したということとは否定できない、と思うのです。その辺の構造的な矛盾というのがどうしてもあると思います。

次に、これは正宗と学会だけの問題ではなくてもっと大きな問題になるかもしれませんが、とくにいわゆる既

成仏教が本当に「教団」というに値するほど組織化されているかということには、私は前から大変、疑問を持っております。もちろん、既成仏教の教団の中でも程度の違いはあります。たとえば、比較的組織化の度合いが高いのが真宗系の教団で、日蓮正宗なんかも組織化の度合いがかなり高いほうだと思いますが、真言系その他の既成仏教の教団というのはやや極端な言い方をすれば、個々の寺院の単なる集合に過ぎない。形式上はたしかに包括・被包括関係になっけていても、実質的には個々の寺院の集合体としか言えない場合が多いのではないかと。したがって、個々の寺院というのは檀家組織というのが基本盤ですから、極端になると、その檀家の取り合いみたいなことが起こる。組織が固いところ、つまり、檀家や信徒の多いところは当然、いろんな意味で優位になります。から。本山クラスというのはどうしてもそうなりますね。それとやや似たことで、現在はそれほど顕在化しておりませんが、日蓮正宗の個々の寺院の場合も、少しずつそのような傾向が出てきているのかな、というふうな目で見ていっているんです。

司会 その傾向というのは、具体的には何でしょうか。

田丸 その傾向というのは、つまり、個々の寺院が今は正宗のかなり強い全体としてのコントロールの中に置かれていたけれども、やはり次第に個々の寺院の利益を追求する方向に行きつつあるのではないかと、ということです。私の知識では、いわゆる既成仏教だと檀家が千軒、千世帯といえれば相当大きくて、住職の方は一人では廻りきれないし、面倒を見切れない。ところがこの間、何かの時にうかがったら、日蓮正宗の場合は、一寺院当りの信徒数が万単位になることがあるそうですね。

司会 場所によっては、そうですね。

田丸 伝統的な仏教教団の場合には、檀家が万単位というのは想像できないように思います。当然、裕福になるので、そこから墮落といったことが起こってくることは考えられますし、個々の寺院が本山からある程度の自立性を、財政的にも、確立しようとする動きが出てくることも考えられますね。当然、自前の檀家、信徒が欲しくなってくるのではないのでしょうか。

井門 今おっしゃったことですね、たとえば天台宗

とか真言宗とか、非常に歴史の古い教団にこの例が多いのですが、末寺というか、各寺院は初めから完全に個別のお寺という形で存在していたんですね。田丸先生が今言われた、あまり組織化されないところの宗教ですね。組織化されないが故に、比較的うまく提携できていたということも言えるわけです。ところがはっきり言うと、歴史が古いからというより、その曖昧さは体質みたいなものですね。比叡山や高野山なども日本の平安末期頃までは、教団化されなかったわけです。むしろ、以上の大本山の存在すら「別当」なんかつけられて、それぞれの一種の独立した寺くらいの意識しか持っていなかったわけです。

ところが、鎌倉仏教以後になると、はっきりとプロテスタント的な信仰中心の教団組織ができてくるわけです。日蓮宗を含めて……。そうすると今度は問題点が出てくる。というのは、たとえば親鸞から蓮如にいたる浄土真宗にしたって、親鸞は完全に在家仏教でいくつものような感じでした。非僧非俗といって……。ところが蓮如が聖職中心の教団としてしまう。そして石山本願

寺にいたって二つが別れるくらい世襲権威的になっていく。もっともこの経過は、織豊から徳川にかけていわゆる本末系列、系統化していくはつきりした宗教政策のもとに影響されているので、必ずしも仏教教団の全般的な責任とは思いませんがね。

法主・門主の中には、宗教集団がこんな世俗的ヒエラルキーに安住しているのかどうか疑問を残した人がいましたし、信徒の面からは清沢満之のような人が出てくるというように絶えざる相克感を残しながら今日の同朋教団、門信徒会運動に連なっているわけですね。まだまだ一部の僧の理解でしかありませんが、「僧」とは信仰者すべてのことで、寺をあずかる僧は専門家・教師・福祉家としての「専門職」として尊敬されるべきである。信仰の世話役として身を投げ出しているがゆえに尊い、と考える近代派も出てきています。だから非常に良心的な形を（ある意味ではプロテスタント的な性格をも）浄土真宗は残している。また、それが今日、教派の中での対立点にもなっている。

ところが、日蓮正宗と創価学会との場合は、そう思え

ない。要するに、正宗は主流からはずされた教団として、僧職中心の小さな田舎教団であったのが、偶然のことから、全く別な形で展開してくる大衆組織を信徒教団として持つてしまったと言えるわけです。それぞれ別個の源から出てきた両方のものがくっついたという形ではないんですか。

司会 その問題を以前にも指摘されましたし、今日も冒頭にも井門先生が、牧口会長が何故日蓮正宗に入信したのかと言われた問題とも関連しますね。私自身、日蓮正宗と牧口会長の出会いを不思議なものだと思っていたりました。話は少々回り道しますが、最近、日蓮宗全体の歴史との関わりの中で、正宗の位置というものを見えています。で、田丸先生がさっき、既成仏教は組織化が基本的には余り進んでないという大変面白い指摘をされましたね。浄土真宗の場合はその中でも進んでいるといえる。日蓮宗はどうかといいますと、江戸期の後半にかけて、日蓮宗の中心はそもそも京都であった時期がありましたが、次第に身延が中心になってくる。身延の地位を決定的たらしめたのは、徳川幕府による本末制度の確立、

寺請け制度の整備という檀家制度の確立でして、その政策に乗じて、全国の末寺を統括して身延が総本山として確立してくるのですね。

この過程で、元来持っていた不受不施的な精神を全部捨てていって、受不施とか受施なんかになってしまふ。それに反発し日蓮の精神は不受不施にあると主張した部分が発火されてしまふ。ある僧侶が、日蓮正宗の伝統は不受不施にあるといっていました。確かに基本的にはその流れに乗っていたといえます。謗法厳禁とか本尊中心とかいう伝統に、それは残っていました。その意味では、戦時中に「神札」を受け入れたという事件は、正宗の伝統を自ら放棄した事になるんですね。

そのような日蓮の考え方の中のかなりラディカルな部分に、人生地理学や創価教育学という、当時としては革新的で反国家主義的な思想を展開していた牧口先生が共鳴したんだと思います。日蓮の中の世直し的な思想が、その結果創価学会にずっと継承されていくんですね。

井門 だから、サクセッション（信仰の継承）というのは一体、何だろうかということになりますね。たとえば

司会の中野さんも言われた信仰観、僧俗観という構造的な問題になりますね。

基本的には、正宗の方はある意味ではかなり伝統的な体質を持っていて、いわゆる血脈とか、そこから発する権威が信仰の源泉となっている。今回の法主云々ということも、結局、その線が出てくる問題ですね。

これは、どう判断するかはそれぞれ各人の立場ですが、しかし現代的な観点からすると、かなりアナクロニズム（時代錯誤）だと言えないことではないと思うのですね。聖教新聞の識者の声の欄で、九州大学の稲垣さんが、正宗の意識は「教皇無謬説」を発表した「第一バチカン公会議」（二八七〇年）時代そのものではないか、と書いていました。たしかにそのような見方は十分できます。法主の権威の強調の仕方には、教皇無謬説にほとんど近いところがありますから。

これは神学というか教学上の立場からは、それ自体が悪いとは必ずしも言い切れなと思います。これはやはり中央集権化を志向する教団の宿命みたいなもので、それを極端な形で追求しようとすればどうしてもそうなら

ば、メソヂストの歴史をみても、創始者ウエスレーは聖職者としてカトリックや国教会を通じての信仰の正統性の継承を一方では認めるんですね。ところが同時に、個々の信者の「回心」に重点を置き、回心そのものに信仰の権威を置きました。すなわち神の個々人への呼びかけのことです。それは「先在の恩恵」（アダムとイヴの原罪に先立ち、神は人間を神の似姿として先在的に創造している。であるが故に救いの可能性は、個々人すべてが持っているという論理）をもつて神はすべての人に呼び掛け給う、という回心の論理を同時に使っているわけでしょう。ウエスレーは、そこで矛盾してくる。結果として、メソヂストの教職観はいわゆるバンテイングラ（国教会の聖職にはなっておらず、説教者として新教派メソヂストの中で選ばれたリーダーたち）の、聖職者として使徒職を継承していない連中たちが権限を持つ、いわゆるバプティスト方式に途中で変わっていくのです。といったようなサクセッションという問題は絶えず、様々な宗教で起こってくるんです。

田丸 そうですね。このあたり、基本的にはさきほど

ざるを得ないからです。だから、そのこと自体はどうってことはないが、ただ古いという判断はできると思いますがね。

井門 僧侶の中で学会の側に立つて宗会などで反乱を起こしているような方はいらっしゃるのですか。というのは、ウエスレーのように、牧師として任命されたり、他の仏教集団のように大僧正として任命されている聖職者は創価学会の在家人リーダーの場合にはいない。だから、教会付置の信徒組織、または運動としてのカトリック・アクションなのかな、とも思ってしまう。

司会 そのカトリック・アクションに近いのが法華講でしょうかね。

井門 とするならば、その僧職自体が分かれてしまふ可能性も出てきますね。今の法主上人の権限から脱出して回心事情を重視する僧職（すでにサクセッションは受けているし、仮に免職を受けても回心の論理に立つて権威は守り得る）が仮に出てくるとすれば、教団分裂の形も出てきますね。ただし現在の宗憲次第ですが、「寺」の持ち出しすなわち分離は難しいでしょうが……。若干、今回の

場合は学会側に立つ坊さんたちもいるようです。だからといって自分達のサクセッション上の権限への思いもあって、明からさまに学会支持を表明するところまではいいないようですが。非常に厳しい態度を取っているのは、日顕師とその周辺と、あと「僧」の意味を出家と厳しく解釈する若手の僧侶と聞いています。

もし今回の問題があくまで「同じ信仰」に立つもの同士の問題であるとして、外部からの介入を忌避していく信念をお持ちなら、同信の人たちが宗制・宗規を使いながら、両方で論戦を戦い続け、気長に教学の展開を考えていくより他に方法はない。あとは、個々の信者たちの解釈の問題になれば、これはむしろ教団の内部でも、信仰の自由があるのか、という今や、憲法学者の間で中心問題点となっている論点にまで至りつついてくる。ここまできると正宗・学会その両者に困ることも出てくるでしょう。むしろ、政教分離に関わる「国と宗教」との信教の自由の問題よりも、最近、自衛官合祀問題から派生した最高裁の判決には、教団の中の個々の信仰の自由というのはい体何ぞや、を提起してくれているとも思えます。

に一万人もかかえる寺があるとすれば、キリスト教の大教会のような司祭、副司祭、執事に類する多数の僧職も置かなければならなくなってくる。あるいは仏教寺院で一番代表的なのは、曹洞宗の別院の問題。巨大な建物を維持していくだけでも大変な資金がかかるので、あくどいくらい戒名料とか葬儀料、これを糸目につけずに集める。かといって僧職の中には、それをよいことにしてゼい沢の極みをいく者もある。

ところがいざ教団内部に入ってみると、それこそ悲鳴をあげているような田舎の末寺もある。また、大変な肉山だといわれている都市の浄土真宗の寺に行ってみると、僧侶は毎日のようにお逮夜まいりに追われている寺もあれば、伝道にくたびれ果てている僧もいる。寄金は——少額を多数数から集めているにしても——大いに集まっているように見えても、通常の信徒廻りの他に、伝道集金をしようとするいろんな雑費がある。手伝い僧侶や専門家を雇ったりなどの。ところが、その辺になってくると仏教寺院は大福帳的な経営であるが故の費用の判定の仕方がめっちゃめっちゃという側面が出てきて、大都市

す。

田丸 これは難しいですね。

井門 私は、いわゆる個々人の退会する自由でしかあり得ない、とは答えておきましたがね。この問題点は個々人の分離のみならず教派内の分裂もふくんで実は日本だけではなくて、アメリカにおいても出てきているんですね。多様価値時代の新しい状況です。

田丸 先ほどから、一つ感じているのは、感情的問題云云ということもありますが、具体的なきっかけは最初に説明していただいたように、冥加料の問題ですね。やはり経済問題が相当あるようです。そうじゃないですか。

井門 それは、きっかけとしてあると思いますよ。

田丸 だけど本質じゃないですね。

井門 ええ、問題点はそれぞれに複雑ですが、たとえば冥加金を上げてくれ、と言う場合、理由がはっきりしておれば信者も問題にしないでしょうが、今回は少々いきすぎがあるようです。宗教界の事情も表面から見ているほど簡単なものではない。たとえば、今言われたよう

のような世俗社会での寺院経営に頭がまわらない僧たちには、その辺で責められるところもある。

だから、冥加金だって個々の寺院をきちんと正宗の方が調査能力を持って、実態調査も行ない、というようなことを行なっていれば、それほど上げる必要はない。末寺からの志納金で運営も可能となり、個々の信者や学会に「たかる」必要も、今回は、なかったようにも思えます。代表的に言えば、西本願寺の伝道院とか金光教の教学研究所のような、しっかりした自己点検の機関を持っているような教団であれば話は別ですが。

司会 経済的な面では、宗門の方も最近では末寺全体を統制して財政基盤ができてきた。その意味で、これまで創価学会にずっと依存して大きくなってきたけれども、今後は余り依存しないでやっていきたい、という考えも若干出てきたと思うんです。

井門 宗教集団全体をみても、地方の一部の杜寺・教団を除けば、むしろ大変豊かというのが一般の印象であり、また事実でしょう。だから、そういうことに関連して、お互いに内部的な政策的な問題が絡んで表面化して

きたんでしょけれども、私どもに言わせれば、もう少し信徒のことを考えてください、法律は信徒中心の解釈に重点を置く方向に変わってきているんですよ、と言いたいですね。

三 宗教的権威の源泉について

司会 お伺いして、結局、今回の対立の中の重要な問題の一つは、日蓮正宗と創価学会の信仰における「権威の源泉」は何か、という問題ですね。その点を、もう少し詳しく、かつ一般的に論じていただければと思います。

田丸 そういうことですね。もう一つ突っ込んで考えると、「権威」という言葉がひっかかるんですが、そもそも宗教において「権威」というのは必要なのか、というところまでいってしまうのではないのでしょうか。

たとえば、カトリック的な発想で言えば、それこそ信仰の権威という発想が出て来んですが、これを、もう少しプロテスタント的な方向で考えれば、権威というのは万人祭司説のように、各人各人が権威の源であって、

組織的な権威の源泉は必ずしも必要ない、ということにもなる。日蓮正宗で言えば、日蓮本仏への信仰、それから御書、それさえあれば、組織上の権威というのは必要ない、という立場だって当然出てきます。

井門 そうすると、三宝はどうなりますか。私が一番最初に仏教とは何ですか、と言ったのがそれです。

田丸 権威という言葉が適切でないのかも知れませんが、信仰の源泉というレベルの問題と組織上の問題とは、互いに切り離せないけれども、ある意味では分けて考えないといけない場合があると思うんです。ところが、しばしば価値の源泉、信仰の源泉が、組織上の権威、たとえば血脈などの形と一緒にされて考えられがちですね。これは、古い時代ならばよかったと思うのですが、やはり近代以後になると、そうではないということを考えておく必要があります。

井門 その点、立正佼成会が昭和三十五年以降、菩薩道運動という伝道運動を起こすのですが、その際に出てくる理念が非僧非俗と自利即利他であり、さらに中村元・増谷文雄先生の言葉などを利用して、日本の仏教と

いうのは、インドや中国とは違う、いわゆる大乘仏教の真髄といましようか、すべての信徒の助け合い行為そのものがこの世の相を決定する、という一種の倫理仏教への歩みの方向を出してきた。というわけで、出家・在家を問わず日常の倫理活動をエトスとする大乘仏教としての日本仏教だけは、ある意味で日本自体の合理化、近代化、市民化ということにも役立ったという信念を前提にしながら、それ以降、この大衆活動を菩薩道運動として展開し、しかしながら所与の經典は法華経であるとして、一般的大乗仏教への歩みを鮮明にします。

その場合に、教団幹部や専従指導者をどのような意味の存在と捉えるかという問題が起ってきますが、すなわち指導権威の所在の問題ですが、佼成会の場合は、教団幹部や専従者たちは会員への専門的世話役として、かつ菩薩のとくに自利即利他を強く自覚する人というような意味での教師役という形をとります。だから、その点で、森岡清美先生のいう官僚型教団になっていくわけですね。信仰では平等だが、教師かつ恩師としてリーダーとなるという意味ですね。ところが、創価学会はそうはい

かないのですよ。上に日蓮正宗という権威集団を抱えていますからね。

司会 教団幹部や専従職員の意義・あり方の問題は、創価学会の方でも、今回の対立を通して大分自覚してきたようです。つまり、リーダーといっても僧侶のように上から信仰の正統性を与えていく存在ではなく、会員の信仰の増進や信仰生活の充実を助け、下から支える世話役としての役割が大事だということですね。幹部やリーダーは決して権威的になったり、いばってはならないという点は、とくに強調されているようです。こうしたことは、大切ですね。

次に、菩薩道を実践していく中に仏教の信仰があるのだという展開は、「内心倫理化」という問題と非常にパラレルな問題だろうと思うのですね。つまり、外的な権威に基づく儀礼中心の信仰ではなく、内心の問題、そして日常の生き方の中に現われる信仰という、ある意味で現代的な信仰のあり方です。

創価学会の運動も、正宗側が強調しているような法主血脈論のようなことではなく、たとえば仏性内在説、万

人に仏性が内在している、その仏性を日常生活に顕現していくんだ、という方向で仏教理念を展開してきたわけです。そして一人一人そのような仏性に生きていくという信徒運動を現代に展開したという意味においては、内心倫理化のかなり進んだ論理を一応展開したと言えると思います。

井門 じゃ、なんで日蓮正宗と……。

司会 いや、だからそれが問題になるんですが……。そこで大きく解釈が違うんですね。日蓮正宗はそこをほとんど認めないんですね。あくまで、三宝、具体的には仏は日蓮、法は三大秘法、僧は日興、総じて、つまり全体として言えば歴代法主と僧侶全体。これが信心の根源だと、極めて実体的な権威論を強調しておりますね。いつもそこがネックになっているのです。いつもそこを突き破ろう、突き破ろうという運動という面もあるのですね。

田丸 これは最初に言われた信仰観の基本的な食い違いということでしょうね。

司会 だから現代においては、さきほど話された内心

倫理化された仏教信仰をしていくというのが適当なあり方だと思うんですが、結果として、その方向へ運動を展開していった学会と、伝統的な型にいつまでも止まっているものとのズレが表面化してきたとも言えるわけですね。

井門 カトリックの場合は祭司型をとって、僧職の絶対権威を主張するけれども、しかし、今日ではかといって他の宗教集団の権威も相互の尊重の意味で認めます。自己の絶対性を信ずるがゆえに、逆に寛容に、他とは今は協調もするし、お互いに協力するという面もあります。けれども、本来、自己の立場に自信がないのでしょうか、あるいは伝統的に孤立してきた者の悲しみやひがみのせいでしょうか——すみません——、正宗や創価学会の場合は、まだ自分たちのみの正当性に執着しきる。非常に日本的で、自分たちの家を守る意識と同じような面があります。でも、まだ創価学会からは他集団との協調をどうするか、あるいは外国との協調をどうするかという問題を、真剣に、かつ積極的に考えていくという態度が出てきているのですがね。日蓮正宗からは出てきたこと

がない。その辺のところに、もし今回の権威の問題に当たって、迫っていくところとすれば、「日蓮正宗は仏教の基本思想をどうお考えなんですか」と、一番初めに申し上げたことに帰っていくのです。

田丸 まさにその通りだと思いますね。もともと、そういうことも事は解決するわけではないで、とくに正宗の側が時代感覚みたいなものを、本当にもっておられるのかどうか。

井門 ちょっと、わからないですね。ほとんどないに等しいのと違いますか。

田丸 非常に疑問に思うのですね。とくに最近、グローバル化という問題が出ており、仮にひいきめにみても、学会の方はSGIにしても、非常に積極的に進めておられますし、対社会的な感覚も大いにあり、むしろそれにポイントを置いておられるような傾向があると思うのですが、正宗の側では、私どもが見ているかぎりではそういう意識はほとんどないように感じられる。つまり、現実の社会のリアリティに目を向けておられないのではないだろうか、とそう思わざるを得ないという感じですね。

いったい、どういうメンタリティなんだろうかと、ちょっと理解に苦しみますね。それほど信仰の純粹さ、頑固さがある意味では保ってきたと言えなくはないんですけど、しかし、それは決して勲章にはなりませんね。

司会 明治以降の宗門の歴史をたどっていくと、興味深い側面があります。明治三十三年に宗教団体法のもと大石寺がその末寺をひきつれて本門宗から独立し、日蓮宗富士派となるんですが、その時文部大臣に提出した「宗制寺法」によると、管長が選挙制になっているんですね。大学頭というのが次期管長候補者なんですが、その大学頭の候補者、つまり次期管長候補が三名、教師による選挙によって選ばれることになっていました。その候補の中から評議員会の承認を得て、管長が大学頭を任命するという手順を採用していました。この頃は民主的だったんだなと感心して、その由来を調べていったところ、宗門が一派独立の法人認可の申請を行なったところ、文部省から管長は選挙制にするようにと言われたという話なんです。

井門 その後はどうなんですか。

司会 結構、続いていました。昭和二年の宗制宗規では、管長候補一名を選挙で選ぶことになりましたし、昭和二十二年の宗制を見ますと、管長は血脈を相承して法主と称するという規定が入り、また管長候補を学頭と称して、その候補三名の選挙を行なう。その中から「参議會」が一名を選定する、というように若干手直しをします。このころは、民主的だったんです。ある宗会の議事録には、宗会議員に信徒も入れるべきだという提案者がいたという記録もあります。開明的だったですね。

それが昭和四十九年の改正で、選挙制を一切取り払って、法主が次期法主を単独で選定できるという規定に変わり、法主は一宗を総理する管長を兼ね、管長は宗教法人の代表役員をも兼ねるという三位一体の体制ができあがる。全権を法主一人にゆだねるといふ、これまでとは反対に、一権集中化の方向に進んでしまいます。

管長候補の選挙制は、血脈相承を重視する宗門の伝統にそぐわないということです。管長や代表役員をも兼ねるといふ体制は、いかにも時代逆行という気もするのですが。宗教教団の民主化というのは、必ずしも不可欠

のものとは思いませんが、何か、戦後民主主義が進展していくにつれて、それを否定する方向へ宗門が動いてきたことが分かり、歴史や時代の変遷から何を学んできたのだろうか、考えざるを得ません。

田丸 さきのアイデンティティを明確にする必要に迫られたということですね。そういう形ですね。たびたび出るようですが、「第一バチカン公会議」でも、ある意味では時代環境に対する防御的な姿勢が根底にあって、そこから極端に権威主義的な方向が出てきたと解釈ができるわけです。それとある意味では似た方向じゃないでしょうか。

四 在家仏教運動と現代

井門 ところで、先ほど問題提起した点ですが、仏教とは何でしょう。日本の各宗派は天台とか真言とか、ある意味では中国経由の仏教の経典や法脈を継いでいますよね。その伝統によって、それぞれの教派は法華経とか無量寿経とか、諸宗の経典があり、また仏教には元来、多様な経典や思想の展開を許したという面があるから、

そういった意味では仏教が広範な様態をとって現状へ至

っている事情はよく分かるのですが、今回の問題を聞いていると、ご本尊はこれであるとか、日蓮本仏であるとか、特定の形で仏の概念が実体論として展開されていて、逆に本来の仏や仏法の概念が拡散してしまっているようにも思えますね、忘れ去られているというか。理念的仏という、法身仏というのが教義の表面に出てこない。

その辺が、浄土真宗ですら、時には外部の者は面くらいます。親鸞、親鸞でしょう。まあ救いは、絶えず清沢満之のような教学者や哲学者が出て、親鸞の教えを「仏」に還元してくださることでしょう。せいぜい西方浄土という用語あたりを中心に、仏教一般理念としての仏の主張を行なわれることはよく承知していますが、現実には、松野純孝先生がおっしゃったけれども、日本の仏教はすべて大乘仏教として現世利益仏教、すなわち、現世における苦悩の解消というところに救いを見る傾向があるようです。そういった意味で庶民一般に生きる大乘仏教という事実はよく分かるのですけれども、いまもう一度、むしろ素人として聞きたいのですが、人々が仏教と言っ

ている根本的な理念は何なんでしょうね。

田丸 それは難しい問題ですね。私にお聞きになっても、決定的な答えは出てこないと思いますけれども。

井門 今回のような問題が起こってもですね、決してそこが問われていない。そして、所与の経典としての法華経に基づいての議論もあまり出てこない。この際に本格的な教学論争も聞いてみたいものです。

司会 いや、出てきますよ。創価学会からの問題提起の一つは、仏教における僧宝とは何かとか、僧と在家の関係はいかにあるべきか。さらに日本的な先祖供養と仏教の儀礼に本来的な関係はあるのかなど、教学の担当者が書いたりにしています。この仏教を今日において意義ある普遍性をもった思想として発展させなくてはならないという基本的姿勢で論陣を張ろうとしているようです。この十年くらいの池田名誉会長の指導も、仏教一般の理念をふまえて、いかなる文化圏の人たちにも理解していけるような仏教の展開をしていこうとしているように思えます。

ところが、一般仏教ではそうでしょうが、日蓮正宗の

場合は一般論はあてはまりません、と返ってくるんです。先日もある機会に、正宗の一部に見られる権威主義的な体質は、江戸期の檀家制度の形成過程で、本寺―末寺制度が強化される中で生まれた歴史的な産物であり、決して宗祖の教えによるのではない、と話した所、「師弟子の法門」を否定したと批判されました。

田丸 初めから議論のレベルが違ってらるんですね。議論が成立しないですね。

井門 先ほど学会では、僧と俗の関係について改めて問題提起をしているとおっしゃいましたが、牧口会長が一つの教団を選んだ、信仰を選択した本来の意義、そして在家の立場で新たな運動を展開した意味を考えてみる必要がありますね。

田丸 一般に、仏教系の新宗教は在家主義というふうに言われていて、一応は、当たってなくはないと思いますが、ただその場合に、在家の定義の問題がからんでくると思うんです。つまり、既成仏教だって、本当に厳密な意味での出家ではないですからね、日本の場合。大抵の場合、妻帯もしているし、経済的には在家でしょう。

いわゆる仏教系の新宗教は既成仏教ではない、という意味で在家といっているだけで、形態的には多少の違いはあるとしても、そう根本的には変わらない。つまり、既成仏教の場合は一往、トレーニング・システムができていて、ある程度やると、何の位か分かりますが、位階のようなものが与えられることになる。いわゆる新宗教の場合、それができつつあるけれども、まだそれほど固まっていないでしょう。

司会 それはこれからですね。

田丸 それは組織化の問題ですが、そうすると、在家主義というものの本当の内容は何なのか、という問題があるのではないか、と思う。

井門 頭そっただけで出家なの？

田丸 そうそう、そういうこと。

司会 だから、逆に言いますと、戦後の新宗教運動が在家、つまり信徒中心に発展してきたということは、世俗の日常生活を送っている人々が担い手になったということでしょう。だから、なぜそういう人達が担い手になったのか、もしくはならざるを得なかったのかという問

題は、宗教社会学では常識的な問題ですが。

井門 田丸先生が見事に質問してくださったので思い出したのですが、金光教などが、一番悩んでいるのがその問題です。教師と信徒の区分が信仰上から問えば、どこにあるのか。もともと出家という概念がない新しく派生した集団ですからね。ただ、「おひろまえ」に座るといって、教祖の体験を日常のこととして追体験し、教祖の体験と共に生きるという、その修業の一念をもって教師となる、あるいは教祖においての神との出会いを追体験しつつ、おひろまえに坐りつづけねばならないその大変さを身を持って知る人を教師と規定するという、それ以外にない聞いています。その体験の上で教服を着する資格ができるらしい。

司会 教師と一般信徒の間には、本質的な差はないんでしょうか。金光教の場合は。

井門 おひろまえに座るといふことは決定的に教祖と体験を同じくし、神と出会うことのようにです。だから信徒の方はどこで拜んでもよろしい、と言われているし、ただ救いを求める、まだ、決定的な態度にはなっていない

い。神との出会いは教祖そのものの体験になる特殊性であり、その意味で権威となるようです。

司会 信仰が決定する段階というのが、教師になるということなんですね。形式的なものではなくて。

井門 神とともに日常にある、ということですね。金光教の場合は、そもそも在家、出家の区分がないが、しかし教師と信者の違いは出てくるようです。安田好三郎さんにそのように聞いた覚えがあります……。記憶上のことです。

田丸 出家、在家を分けるのは仏教的な発想ですからね。でも、両者の本質的な差は、信仰の上ではないんだということが大事でしょうね。特に、近代以降はプロテスタントのように、全生活を信仰によって律していくところに信仰があるともいえますから。

五 現代における宗教教団の課題

井門 現代における信仰のあり方の問題が出ましたから、現代における宗教教団のあるべき姿や課題について話して、終わりにしましょうか。

アメリカやヨーロッパでは、この問題がキリスト教界をこえて、随分大きく出てきており、そしてそういう問題意識が海外の仏教界においてすら出てきています。たとえば、大正大学の星野英紀君が翻訳したジョージ・タナベの本などですね。海外では非常に大きな問題として衝撃的なことがたくさん出ているわけですが、それがどういふわけか日本では目につくほど出てこないし、また海外の動きも伝わらない。

そういった問題を、信徒動向について統計的に調べて見て、初めて僕は新・新宗教という概念を定着させてもいいなという気持ちになってきた。現実には宗教集団の教義からみれば、新・新宗教なんてありえない。祖霊信仰から呪術的信仰まで戦前・戦後に全く変わっていない。しかし信徒の形態や宗教を利用する世間の態度の変化からみると、ごく最近の新しい運動は、昭和二十年代発生の教団と種類が違うということが分かってきましたよ。新宗教に第四世代が出てきたということでしょう。

田丸 一つの見方をすれば、さつき組織ということの問題にしましたが、初めから組織を必要としないという

か、拒否するというか、組織に余りウエートを置かないようなタイプの宗教が生まれてきている。ある意味で個人主義ということなんでしょうね。内心とか内面性とか、そういう方向を非常に強く意識するような宗教、ということでしょう。組織化する宗教の最大の代表が創価学会、あるいは立正佼成会ですが、そうではなくて、そもそも組織化ということを余り追求しない宗教運動が現われてきたということじゃないですか。

井門 はっきり言ってしまえば、昭和二十年代の創価学会や佼成会の発生の時には、社会の価値観の空白に対して、自分なりの生活目的観を大衆に与えるため、当時の人々の精神的欠乏を埋める積極的倫理 (dispositional ethics) を与えることが、戦後新宗教の出發になっていくんです。落ちこんだ日本をそのままにしておかないために、大衆の組織化、階層化を通じて様々に価値観の回復への努力が行なわれた。あくまでも日本の場合には、「孤独な群衆」とは言えない。むしろ集団に甘えた群衆がいたと言ってよい。他方で、新宗教に出来ない連中は労働組合に行ったり政党に行ったりして組織化され、あるいは

マイ企業、我が家企業に属して、たとえば、松下のPH P的倫理回復運動の中に安らぎを見出し出していた。それからズレる時に農村から都市への貧しい還流人口や中小企業従事者が新宗教によってオーガナイズされましたね。そういったような目的論的組織化をはっきり行なっていたものですよ。

ところが、いわゆる一九七〇年の石油ショック以降、そして、その傾向がはっきりしてくるのは一九八五年のプラザ合意の後、完全なグローバル化の時代になってからです。技術の移転は公害の拡大となり、企業の国際化は国家の意味を失くすボーダレス現象を起こし、各国金融や為替は相互依存の状態のうちに世界の動きにつれて変わっていきます。豊かさの理念も世界状況との関係の中で定まってくる多極化状況の展開がそれです。

七〇年以前は、さつき言った価値の欠乏感覚から、いわゆるリバイタレーション (伝統的価値の再活性化) という形で新宗教も組織化されてきたのです。その頃は群れることによる、あるいは権威のまわりに集まることに大衆は反応した、すなわち同一化の方に特徴があった

ようです。アメリカでもそうだったのですよ。豊かな国だったけれども、やはり戦後の不安感、豊かさの裏にある欠乏感があったのです。ところがベトナム戦争のあと、しかし豊かな社会は一応続いている、そういう段階から、「差異化」の時代になってきた、ということを経験した大の今田さんが主として言い出したんですが、いわゆる欠乏を中心とするのではなくて、私は自分独自のことをしたい、という生きがい、自分なりの生きがいを求める傾向の方が明らかとなりました。

田丸 ええ。ある種の、「他の人と違う」ということです。

井門 そのくせ、外には情報化社会が待ち受けているから、きれいにコントロールされているのですけれども。あのころから創価学会でも、貧・病・死の苦に関する関心より、いわゆる「生きがい」を求めます。修行します」が全面的に出てくるんです。そのころから学会も大拡張をストップし始めます。総評と同じくらいの大きさになりますから、末端に手が届かなくなったという理由もありますがね。同時にやはり若者層も、ある一定の豊かさ

の中から分散志向が出てきたというのも事実なんです。これに先駆けて出てくるのが大学騒動ですね。自分なりの祭りを作りたいと、と柳川さんが言ったこともあるのですが、それ以降、石油ショック時代を経て一九八〇年代の安定期から、宗教を求める庶民の志向が大きく変わってきます。イギリスの調査でも、自分なりの生きがい解釈、すなわち人生の確かさを自分で探究するという傾向が強くなりだしたという調査があります。その頃から大きくなりだすのが真如苑、阿含宗、最近になってオーム真理教に幸福の科学などです。

真如苑の最近の状況はご存知でしょう。教主の葬儀でも、あの光でピカピカのお芝居の雰囲気で作られる。ああいう調子で自分なりの心の中のパフォーマンスを求めさせる。自分たちで勝手に解釈をつくらせる。阿含宗にしたってそうなんですよ。星祭りなど見せ場中心の祭儀をやっていますが、一種のパフォーマンスですが、とにかく信者に「違い」を認めさせる。しかし解釈は各自にゆだねる。今度のオーム真理教はご存知のようにパフォーマンス中心ですよ。恰好のよさを各人に求めさせる

向です。

田丸 要するに、新宗教運動の質の変化ということですね。戦後における質の変化です。ここでも一つ、考えておきたいのは、外国の場合と日本の場合と、どこまで違うのかという点です。非常に微妙な問題だと思ふんですが、いわゆる日本的なものには、アメリカやとくにヨーロッパとちよつと違った前提条件があるということですよ。一言でいうと、日本には「多元的な伝統」がもともとある、ということですね。ブルーリズムが。

もともと、そういう文化的土壌があるから、いろいろなレベルで質の違う、性格の違うものが混在できる。組織のレベルでも、シンボリックなレベルでも違うものの併存ということが見られるわけです。

これを組織のレベルでいうと、創価学会・正宗問題もある意味ではその枠内で位置づけることができると思ふのですが、いわゆる伝統集団と新しい組織とが、別個でありながら、しかも奇妙に共生している例が少なくない。ある意味では役割分担をして成り立っている。

その典型的な現われが墓地や葬義の問題です。とくに

が、自前の教義などほとんどない。それらが一九七三年、石油ショック以降ですよ。そして、一九八五年のプラザ合意の時からそうした傾向が確定化してくるんですね。そうすると、創価学会、佼成会、あるいはPHPなどの、いわゆるポジティブ・シンキング系の集団活動を中心とする倫理運動のグループと違うものが出てくるようになります。

田丸 それはそうでしょう。ちよつと、質が違う。

司会 信の宗教より行の宗教への転換でしょうか。

井門 それがターナーの後を継いだリチャード・シェナの書いた「ビトゥイン・シアター・アンド・アンソロポロジイ」、あの本に書いてある。一つは、市民宗教的行事のように大規模で、しかし自分たちの感興のままに動きまわる。観光リチュアル（儀礼）でもあり、密教的、シンボリックな方向、インドへの関心を強く出した。それからもう一方は自分一人のパフォーマンスとしての参加（島田裕己『いまどきの神さま』など参照）や幸福の科学式に本を自分で読んで自分一人の解釈で充足される行為などの、この二極化というものが一九七五年以降の傾

新しい運動の場合には、いま井門さんが言われたように葬祭、儀礼を自分で手がける方向も出てきてはいるけれど、しかし、かなり多くの場合は、葬式などは既成仏教で、ということをごに認めているケースがかなりありますよ。つまり、そういう儀礼は伝統的なものに任せておいて、自分たちはそれとは別個に、信仰というふうないうこともできるし、生きがいということもできるし、そういうものを追求するんだ、という自己理解の上に立っている。そういう意味の奇妙な共棲関係ですね。それが場合によつては、いま井門さんがおっしゃった新しい質の違ったものを成り立たせている一つの大きなバックグラウンドになっているんじゃないんでしょうかね。

司会 そのバックグラウンドというのは、先祖崇拜のような日本の基層文化ですか。

田丸 そうそう。やはり、そういうものはずっと続いていて、それはそれなりに、ある程度はやっているわけです。だけど、ある見方をすれば、それはそれだけだ、と割り切ってしまうと、その部分は菩提寺や何かに何としたりしてすませるが、そこには余り生きがいとか何と

かいう面倒くさいことは求めない。生きがいとかパフォーマンスのかつこよさは別のところに求める、とそのように奇妙に割り切っているという気がしますね。

井門 それは堀一郎先生の言われた日本人特有の宗教的ユーティリティ（功利主義）の論理という言葉で前から言っている。そういった方向から日本の宗教的深層文化論とでもいうものを書いてみたら面白い。そこでいかにも、たとえば阿含宗やオーム真理教にしてもアメリカの一九六〇年か七〇年代の新宗教の影響を受けてるようでしょう。受けてるようだけれども、まさにいま田丸さんが言ったように、日本的枠内での展開ということになるんですね。

田丸 そうです。たしかに、影響を受けていることは事実だと思いますが、ただそれを日本が持っている伝統的というか、古いパターンにはまる枠内でしか受けてない、ということだと思います。

井門 このSF時代にそういう深層文化を茶化しながらつき放して見ている代表例が丹波哲郎の大霊界。あるいは「お葬式」という映画になって出てくるけれども、

まさに映画屋のセンスというのは鋭いと思う。我々、見せてもらってびつくりするんだが、そこにある日本的センスを掘り出してみせるテクニク、見えないものを見せてくれるテクニクを分析しなくてはいけないと思っているんですがね。

司会 もう一方で、わりと既成仏教でも葬式仏教とかいわれながら、意外と生き残っているでしょう。それで、葬式になるとそういう既成仏教に依存しようかというセンスがまだ残っていますね。それから、創価学会にする校成会にしろ、組織宗教は急激な成長期は過ぎているにしても、それなりに基盤を持っていて、ただそれも今の状況にどうアダプテーション（適応）するか、という大きな問題を抱えていることは事実でしょうね。それと、「新新宗教」とか、先生のおっしゃったような個人化されたいろんな宗教運動が展開してる。そういう意味では、井門先生がかつて言われた四つの、つまり個人宗教とか文化宗教、組織宗教、制度宗教などの機能分化。あれがまさに、それぞれ役割分担を果たしつつ、結構、共存しているように思うんですね。

井門 オールニイの本の題名で、『メタファー・オブ・ザ・セルフ』という業績、私はこれに代表させて今日の時代を表現させてみたいのですが、アメリカでもこの傾向はおよそはつきりしているようです。いわゆる、自分のパフォーマンスで自分の自伝を書くという形でしょう。お葬式を含めてね。それが一九六〇年以降、非常に盛んになっていく。

宗教界に関連して実際に、出る本、出る本が個人の価値をどのように生かしますか、というような内容になってきて、シャーリー・マクレーンの本もその一つですが、こういう本が売れても、既成教義に沿った本は沈没する。大川隆法の本もそんな傾向にのって一種のテキストになり、売れているのはありませんか。まさに日本にもその傾向が出てきていますよ。自分で自分の生きざまについての自著を出版しませんか、から始まって……。

田丸 自分史とか。

井門 だんだん葬式にしたって、単純に既成の葬式屋に任せるか、そうでなければ任せても簡単に、坊さんにお経を読んでもらうだけで済ませてしまうような既成伝

統関係に依存しないで、自らに適したパフォーマンスとしての式が増えている。そういった意味での、一種のミイズムという言い過ぎだけれども、そういう傾向が増えてますね。

田丸 やはり、時代的なものがあるでしょうね。それは日本にもある程度あてはまりますし、外国でもあてはまりますよ。時代的な流れみたいなのと、文化的な差異みたいなものですね。いわゆる日本的なものとは非常に奇妙で、分析するのは難しいですけども、一緒にあるような気がしますね。

司会 たとえば、アメリカなんかですと、『ニュールーラル』という本なんかでは、アメリカは七〇年代の末から文化的な地殻の大変動が起きているんだと主張しています。つまり、それはジュリタニズムみたいな、上からサンクション（正統性）を与える文化形態が、セルフ・アチーブメント（自己実現）の追及という下からの文化、意識に基本的に塗り変えられていくんだ、と。そういう大きな変動が起こっているんだ、という分析をしています。ただ、そういうものは日本では起こっていないん

でしょうか。

現代の新しい状況が、はっきりと描かれてきましたが、その状況に応じて、新しい宗教運動も出現し、既に発展した教団も新たな適応戦略が問われているという問題が明らかになったと思います。他方で、世界の秩序も大きく変貌してきています。このような時代にあつて、宗教は新しい文化や人間の生き方のモデルを提供できるか、それともそうした現代的な課題に回答できずに既成化していくか、岐路に立たされているということが明らかになつてまいりました。

もつと論じていたきたいテーマも残っているのですが、この辺でひとまず終わりたいと思います。長時間に及んでしまいましたが、本日は大変にありがとうございました。

(いかど ふじお・桜美林大学教授、筑波大学名誉教授)

(たまる のりよし・大正大学教授、東京大学名誉教授)

(なかの つよし・創価大学助教授)